

祢軍墓誌銘の「日本」と白村江戦前後

小林 敏 男

A Study on the word Japan in the epitaph for De Gun

Toshio KOBAYASHI

はじめに

我が国の国号は日本であるが、それが国号としていつ頃成立したのかははっきり断定できない。例えば高等学校の教科書である『詳説日本史B』（山川出版社）をみると大宝律令が完成し、律令制度による政治の仕組みもほぼ整ったという所の注で「日本」が国号として正式に用いられるようになったのもこのころのことである」として、大宝令完成の時期としている。また『日本史B』（三省堂）では、天武天皇のころ、大王にかわって「天皇」の称号が使われはじめたこと、「また七世紀後半には、倭にかわって『日本』の国号も用いられるようになった」として、日本国号の成立を天武朝頃としている。さらに『新日本史B』（山川出版）では、「七〇二（大宝二年）に久しぶりに派遣された遣唐使は、唐の役人に対して「日本」国の使者であると答え、倭の国名を改めている。おそらく飛鳥浄御原令、あるいは大宝律令において「日本」という国号を公式に定めたので、この時、はじめて中国に対して表明したのであろう」としている。高校の教科書を見ると近年では天武・持統朝頃、日本国号が誕生した、成立したとするものが多い。

戦後の国号の研究史をみてもその成立時期について孝徳朝説、天智朝説、天武・持統朝説、文武朝（大宝律令）説と諸説が入り乱れていてまだ定説化するまでにいたっていないが、天武・持統朝頃、あるいは大宝律令成立説に落ち着いてきたようにみえる。

そもそも国号の成立というが、この「成立」という言葉を良く吟味してみると学問的にはたいへんむづかしい。以下、筆者の見解を示すと以下

のようになる。

まず国号となる前史、即ち「日本」という呼称の起源でいえば、中国の古典で東方はるか太陽（日）の昇る未開の処という意味で、方位を示す概念として使用されており、それが特定化されて朝鮮半島の地を経て我が国にまで到達した。それは我が国倭国の異称・別称としても使用された。それは国名なのであるが公式の国号にはなっていない。そうした異称・別称ともいべき国名は、文筆の歴史としては我が国より進んだ百濟側の史（史官）によってまず使いはじめられたものであり、それが渡来人によって我が国にも伝えられた。多分天智朝頃には倭・倭国の異称・別称としての「日本」が流行したのであろう。

そして、倭国に替えて日本を国号として対外的に使用することになった。それはおそらく白村江、壬申の乱を経て律令国家体制の完成する中で、具体的には「日本書紀」編纂を経て、飛鳥浄御原令で公式に国号として決定された。そして日本号はまず、新羅との外交で使用され、文武朝の大寶二（七〇二）年の遣唐使（粟田朝臣真人）で中国（唐）に伝えられて認知されたものとおもわれる^①。

以上が筆者の理解であるが、成立時期についても我が国の場合、国号になる前史を考えることが重要である。なぜなら国号は対外関係の中で誕生してくるもので、その場合アジア大陸の辺境にある我が国にとっては文字の問題、文化の問題がかかわってくるからである（我が国の固有の国名はヤマトであり、それを古事記では「倭」、日本書紀では「日本」の文字で表わした）。また、それが国号として公式に決まった時期と、それを使用し始めた時期も区別して考察しなければならぬ。

さて、問題の祢軍墓誌銘にあらわれる「日本」は、筆者にとっては、国号「日本」の制定以前の倭・倭国の異称・別称としての「日本」ではないかと考えるものである。以下論拠を示していきたい。

1 祢軍墓誌銘文について。

(1)

祢軍墓誌銘は「大唐故右威衛將軍上柱国祢公墓誌銘」として二〇一一（平成二十三年）、吉林大学王連龍^②が学界に紹介したもので、中国陝西省西安市長安郭杜鎮で発見されたものと推定されている（拓本のみで原石は不明）。

その銘文は八八四字（一行三〇字、三十一行）にわたり、筆者にとっては難解なものであるが、とくに墓誌銘のもつ華美な駢儷^{べんれい}体のなかに史実をよみこんでいくことは推測になる部分も多い。

祢軍は漢音ではデイ・グン、「日本書紀」では禰軍とあってネ・グンと訓まれている。祢は禰の略字である。墓誌銘によれば、祢は姓、軍は諱

祢軍墓誌銘

- (蓋) 大唐故右威衛將軍／上柱國祢／公墓誌銘
- 1 大唐故右威衛將軍上柱國祢公墓誌銘并序
 - 2 公諱軍、字温、熊津嶋夷人也。其先与華同祖。永嘉末、避亂適東、因遂家焉。若夫
 - 3 巍巍鯨山、跨青丘以東時、森森熊水、臨丹渚以南流。浸煙雲以摘英、降之於蕩沃
 - 4 沃、照日月而捷哲、秀之於蔽虧、靈文逸文、高前芳於七子、汗馬雄武、擅後異於
 - 5 三韓、華構增輝、英材繼響。綿圖不絕、奕代有聲。曾祖福・祖譽・父善、皆是本藩一
 - 6 品、官号佐平。並緝地義以光身、佩天爵而勲國。忠侔鐵石、操埒松筠。範物者、道
 - 7 德有成。則士者、文武不墜。公狼輝襲祉、鸞領生姿。涯濬澄陂、裕光愛日。干牛斗
 - 8 之逸氣、芒照星中、搏羊角之英風、影征雲外。去顯慶五年、官軍平本藩一日、見機
 - 9 識變、杖劍知歸、似由余之出戎、如金碑之入漢。聖上嘉歎、擢以榮班、授右
 - 10 武衛瀛川府折衝都尉。／干時日本餘嘯、據扶桑以通誅、風谷遺叱、負盤桃而阻
 - 11 固。萬騎巨野、与蓋馬以驚塵、千艘橫波、援原蛇而縱瀾。以公格謨海左、龜鏡瀛
 - 12 東、特在簡帝、往尸招慰。公徇臣節而投命、歌皇華以載馳。飛汎海之蒼鷹、
 - 13 翥凌山之赤雀。決河皆而天吳靜、鑿風隧而雲路通。驚鳧失侶、濟不終夕、遂能
 - 14 說暢。天威、喻以禍福千秋。僭帝一旦稱臣、仍領大首望數十人、將入朝謁、
 - 15 特蒙恩詔、授左戎衛郎將、少選遷右領軍衛中郎將兼檢校熊津都督府
 - 16 司馬。／材光千里之足、仁副百城之心。舉燭靈臺、器標於瓦械、懸月神府、芳掩於
 - 17 桂苻。衣錦晝行、富貴無革。藿蒲夜寢、字育有方。去咸亨三年十一月廿一日
 - 18 詔授右威衛將軍。局影形闕、飾躬紫陸。亟蒙榮音、驟歷便繁。方謂克壯清
 - 19 猷、永綏多祐。豈圖曦馳易往、霜凋馬陵之樹、川閱難留、風驚龍驥之水。以儀鳳
 - 20 三年歲在戊寅二月朔戊子十九日景午遺疾、薨於雍州長安縣之延壽里第、
 - 21 春秋六十有六。(下略)

①660年 ②666年 ③670年 ④672年 ⑤678年

※賀賀保規「百濟人祢氏墓誌の全文とその意義・課題」(2012年2月25日、明治大学の国際シンポにおけるレジユメによる。()と①～⑤は小林が付けたもの)

(字は温)で儀鳳三(六七八)年戊寅(日本では天武天皇七年)に六十六才で薨去したとあるから、生れは大業九(六一三)年ということになる。祢軍は百濟熊津岬夷の出身でその祖先は中国の永嘉の乱(三〇七〜三二二年、西晋)の時に乱を避けて東の百濟の地に逃げ落ちてきた家で、曾祖父、祖父、父と代々百濟では一品(官位十六階制の第一位)の官職佐平の地位にあった。祢軍自身も日本側の史料「海外国記」「善隣国宝記」(卷上所引)には「百濟佐平禰軍」とあるから祖先から佐平の重職を引き継いできた上流貴族の家柄であった。

(2)

問題の「日本」に関しては、墓誌銘の8行目の「去顕慶五年」の所から、19〜21行目の「以儀鳳三年……春秋六十有六」の部分までが考察の対象となる。

この中で祢軍の活躍と官職の昇格が特記されているのであるが、祢軍の事績の年代を確定できるのは顕慶五(六六〇)年の百濟国の滅亡と咸亨三(六七二)年の「右威衛將軍」号への昇格、それに儀鳳三(六七八)年の死亡年の三つである。そして15行目の「左戎衛郎將」が授けられ、しばらくして「右領軍衛中郎將兼檢校熊津都督府司馬」に遷ったとある官職の昇格・人事も祢軍の事績との関連で考えられるであろう。なお、後述する「日本書紀」や「三國史記」にも祢軍の官職が記載されているからそれもあわせてある程度の彼の事績が推測される。

さて、祢軍は墓誌銘に「去る顕慶五年、官軍(唐)本藩(百濟)を平ぐる日、機を見、変を識りて、劍を杖して帰するを知る。由余の戎を出るに似て、金磔の漢に入るが如し。聖上(高宗)は嘉び歎じて、摺んでるに榮班を以つてし、右武衛瀋川府折衝都尉を授く」とある。

顕慶五(六六〇)年は唐・新羅連合による百濟滅亡の時であったが、この時祢軍は逸早く情況を判断して投降し、唐の皇帝に帰服した。これは春秋、晋の人で蕃国戎に入つて戎王に仕え、さらに戎を出て秦王に仕えた由余に似ており、また匈奴人であった金日磔が漢に逃げ入つたことこの故事の如きであった。唐の高宗は喜んで特別待遇で祢軍を右武衛瀋川府折衝都尉(正五品下)に任じた。

この祢軍の行動は、実は祢氏一族の唐への帰順と連動している。すでに指摘されているように祢軍の弟の祢植(寔進^⑤と同名、「祢寔進墓誌銘」は、兄以上に唐に対して大きな貢献をした。

【旧唐書】卷八十三、蘇定方伝に

定方命^レ卒建^レ幟、于^レ是泰開^レ門頡頏、其大将祢植又將^レ義慈^レ來降、太子隆並与^レ諸城主^レ皆同送款。百濟悉平。分^レ其地^レ為^レ六州、俘^レ義慈及隆、泰等獻^レ于^レ東都。(傍点、筆者)

これを見ると祚植が百済義慈王を將つて投降してきたこと、太子の隆や扶余泰、諸城主などが都に送られて百済が平定されたことがのべられている。このことは「新唐書」卷百十一、蘇烈伝もほぼ同じで、「其將祚植与義慈降、隆及諸城送款、百济平……」とある。

すでに指摘されているように祚植(寔進)は墓誌銘では最終の官職は「左威衛大將軍」(正三品)であるから兄の軍(「右威衛將軍」で従三品)よりも高く、したがって祚植は義慈王の降伏に関して大きな貢献を果たしたと理解される。なお「日本書紀」齊明天皇六(六六〇)年七月条の注(遣唐使の報告にもとづいたものである)に「十一月一日に、將軍蘇定方等が為に捉められたる百済の王より以下、太子隆等、諸の王子十三人、大佐平沙宅千福、国弁成より以下三十七人、并五十許の人、朝堂に奉送る。急に引て天子に趣向く。天子恩勅ありて見前にして放著したまふ」とある。「旧唐書」百済国伝も基本的に同じである。祚軍も俘人ではなかったが、義慈王一行とともに唐の天子のもとにおもむいたのであろう。

(3)

墓誌銘ではこのあと問題の「日本」がでてくる。

顯慶五年は百済は義慈王の降伏もあつて「百済国の滅亡」ということになつてはいるが、そのあとすぐ百済の遺臣や土着勢力(首領、酋長)の唐への抵抗は激しく、七月に降伏があつたものの、九月には百済の遺民は諸城(二〇城)を奪い返し、唐軍の鎮將劉仁願が立て籠る泗泚城を攻撃している。扶余泗泚城は聖王代(五二三年)から百済滅亡(六六〇)までの首都の王城で、唐軍がそこを軍事的拠点としていた。そして、九月には遺臣鬼室福信らは百済復興運動を日本側に伝えてきて、十月には唐の俘人百余人を献上し、救援と日本にいる義慈王の王子余豊璋の百済王即位を求めてきている。

唐の戦略はあくまで長年の宿願であつた高句麗打倒であつたから、蘇定方は「百済滅亡」後すぐさま六六〇年十二月には高句麗征討にむかつてゐる。とくに六六一年七月〜十二月にかけての唐の高句麗攻撃は激しく展開されたが、唐軍は苦戦を強いられ、六六二年二月には撤退を余儀なくされている。

一方、泗泚城を囲まれて孤立化していた唐軍の鎮將劉仁願は本国に支援をもとめ唐將劉仁軌の派遣となり、新羅の援軍もあつて、ようやく泗泚城を百済遺民の包囲から無事解放することができた。

このように「百済国滅亡」というのは、ある意味ではトップの王以下の上級貴族の降伏であつて、百済国内では土着勢力(首領、酋長)が力もち遺臣らとともに対唐への抗戦に一斉に蜂起したのであつて、それが白村江の敗北まで続くのである。また唐は目前に高句麗征討をかかえており、「百済滅亡」のあとの戦後処理に十分エネルギーを集中できなかったことも考えてみなければならぬ。

新羅と唐の間もまた同盟国として緊密であつたわけではなく、新羅は唐の冊封体制下にあり、対百済交戦の際も高宗は大將軍蘇定方(神丘道行軍

大撻管)の指揮下で、新羅王自身を、「岬夷道行軍撻監」に任命して唐軍を支援するように命じた(『三国史記』新羅本紀・太宗武烈王七年三月)。そして六六三年四月になると新羅を鷄林大都督府、新羅王を鷄林州大都督(『三国史記』新羅本紀、文武王三年四月)にして滅亡した百済と同じく冊封国としての新羅も唐の羈縻州体制に組みこんでいく。したがってこの処置に大なる不満をもった新羅は、さらに高句麗征討、平定を契機に唐と対立・対決するに至るのである。

いわば朝鮮半島ははまだ高句麗が平定(六六八年)されていない間はきわめて複雑で、情勢も流動的で、「白村江の戦」に示された日本の百済国復興運動への介入も決して成算のない無謀な企てではなかった筈である。

(4)

そこで墓誌銘に移ると以下のような文がつついていてる。

時に日本の餘曠、**扶桑**に據りて以つて誅を遁れ、風谷の遺叱、盤桃を負いて阻み固む。萬騎野に亘り、蓋馬とともに以つて塵を驚かし、千艘は波を横り、原地を援きて縦び満つ。

公は海左に格讓し、瀛東に魚鏡たるを以つて、特に帝に簡ばるること在于て、往きて招慰を尸る。公は臣節に徇い命を投じて、皇華を歌い、以つて載ち馳す。汎海を飛ぶ蒼鷹、凌山を翳ぐ赤雀は、河督を決して天吳静まり、風隧を撃ちて雲路通ず。驚く鳧は侶を失い、済るに夕を終えず。遂に能く天威を説き暢べて、諭すに禍福千秋を以つてす。僭帝は一旦臣と称す。仍りて大首望數十人を領いて、将に入りて朝謁す。特に恩詔を蒙りて、左戎衛郎将を授かる。

右に読み下した文をどう解釈するかは史実を背景にしながら推測していくことになるが、筆者は「時に……」以下は、六六〇年の百済滅亡から白村江の戦い(六六三年)を経て、称軍が功績によつて「左戎衛郎将」を授かった六六六年のことまでをのべたものと理解している。即ち、六六〇年と六六三年を「滅亡」ということで分離するのではなく、一連の流れの中でとらえたい。六六〇年の義慈王・王子らの屈服を契機として、六六三年に百済国が最終的に滅亡したと理解したい。

そのように解釈するのは、後述するように称軍の功績は二度の対日軍事外交で倭国(日本)の半島への再度の軍事反攻を思い止まらせて、唐側にとつては、「恭順」あるいは「降伏」を暗示するような言質を引きだすことに成功したということであつたからである。

そこで具体的な解釈になるが、「日本の餘曠」は、百済や旧加耶などにいた倭人系集団や倭系百済官僚の「余曠」(残党)で、六六〇年の百済滅

亡の際の戦いにもならぬかの形で絡んでいたもので、彼らは「扶桑」である本国の倭国に拠って唐の「誅」(責罰)をのがれようと画策していた。一方「風谷の遺叱」である百済の遺民たちも「盤桃」である耽羅國を背にして阻固している。

このようなことがあつて、朝鮮半島では多くの騎馬軍団が野を駆けめぐり、その様子は馬背を着けた馬が砂塵をまきあげている。一方海ではたくさんの船(千艘^⑥)が海波をよこぎり、その様子は海蛇を引いたようにして浮び満ちている。

このような緊迫した半島の情況のなかで、公(祢軍)は「海左」(新羅か)に謀をめぐらしたり、「瀛東」(倭国か)に手本を示す外交的手腕をもっていたこともあつて、とくに皇帝から倭国に往きて「招慰」(懐柔)してくるように命ぜられた。

公は「臣節」(臣下としての節義)に従い、命を投げだして「皇華」(皇帝の使者)たることを高らかに歌い、即ち海を馳走した。その時汎海(広い海)を飛ぶ蒼鷹と凌山を飛び立つ赤雀の二つの軍艦(おそらく船体)に守り神としての青い鷹と朱雀の絵が描かれていたのかもしれない、あるいは幟(絵としてか)は大きく「皆」(毗)をかっと見開いて、そのために「天呉」(海神)は静まり、風のトンネルを穿って倭国への雲路を通つた。倭国に近づく二隻の軍艦のため驚いた「梟」(水鳥)は散り散りになり、すみやかに倭国に済むことができた。公は、皇帝の權威を説きのべて「禍福千秋」(半島での軍事活動の利害得失か)をもつて論じた。そのこともあつて蕃国の倭帝(代理者であろう)は、皇帝の「臣」となることを承知した。その結果、唐に引率されてきた「大首望」(首領・酋長)数十人が唐の朝廷に入って拜調することになった。こうして公は外交手腕(画策)を評価されて、とくに恩詔があつて「左戎衛節郎将」(正五品上)を授かった(六六六年)。

2 墓誌銘の論点

(1)

次に論点になりそうな事柄を検討してみる。

まず「日本」を主に百済にいた倭人系集団、倭系百済官僚の「倭」と考える点は反論も予想される。したがってこの点については一つの専論が必要なのであるが、今はその余裕はない。有史以来我が国は朝鮮半島と深いつながりをもつて展開してきた。「後漢書」「魏志」韓伝をみても倭人は日本列島内に限定されずとも朝鮮半島の南辺海岸部にいたことが窺える。「三国史記」新羅本紀にみえる倭人・倭兵の度重なる新羅(新羅)海辺への襲撃記事も単なる造作でなくならぬかの根拠があるとしたら、日本列島内に限定されない倭人の存在(洛東江下流域の東南海辺部)を感じて、また四世紀後半から五世紀後半にかけては軍事王権の性格をつよめたヤマト王権が百済を通して朝鮮南部に深く軍事介入し高句麗と対峙してしばしば交戦をくりかえしている。その結果、洛東江流域の加羅諸國に軍事的力をおよぼし、「任那四郡」(旧馬韓の地、柴山江流域を中心として)、

「己汶・帶沙」(曠津江を中心として)を軍事的拠点として高句麗への決戦にそなえたのである。近年、馬韓の地(全羅南道)柴山江流域に出現した十一基の前方後円墳は倭人系集団、もしくは倭系百済官僚の痕跡を示すものであろう。

五世紀後半以後、百済・新羅が強盛化し、ヤマト王権が朝鮮半島南部にもついていた軍事的・経済的拠点や権益は喪失し、ついに六世紀中葉(五六三年の大加耶の滅亡、「日本書紀」は「任那日本府」の滅亡としている)までにはヤマト王権は軍事的には半島から撤退せざるをえなかった。しかし、ヤマト王権は六世紀中葉以降も「任那の調」という形で新羅に併呑された加羅諸国からの調(貢物)を新羅に対してしばしば要求している。これは、ヤマト王権と旧加羅諸国との伝統的な政治的従属関係を確認するものであった。

なお、「隋書」百済伝には人種構成として百済人の中に新羅・高麗・倭等が雑っており、また中国人も有るとしている。

かつて(明治時代)帝国大学文科大学教授であった星野恒は日本と韓国とは「もと一地にして他境に非ず。其全く別国に変ぜしは天智天皇以後に始まる」とのべて、国粹主義者や神道家から国体を汚すものだと激しい非難をうけた。この星野の論文は、いわば日鮮同祖論に繋がっていくもので、のちには韓国併合のイデオロギー的根拠となったのであるが、天智朝の白村江戦役が日朝関係史を考えるととき大きな転換点であったことは間違いない。

近年森公章は以下のように発言している。

六六三年八月、倭国は白村江の戦で大敗を喫した。ここに百済は完全に滅亡し、倭国はそれまでの朝鮮半島との関係に終止符を打つ。倭系百済官僚や加耶地域に進出・居住していた倭人集団などの存在から考えて、この時期までは今日の概念という国境は、それほど厳密なものではなかった。だが倭の半島からの撤退、その後の統一新羅の成立などもあって、倭人の居住地は列島内に収束していく。それは境域の確立と同時に、後に日本と国号を改める倭国の新しい国家建設のはじまりでもあった(傍点は、筆者)。

森は日本国号を境界論(国境)の關係性で考えており、このことは重要である。白村江の対戦に至る過程に朝鮮半島南部にいた倭人系集団や倭系百済官僚が介在していたとみてよい。

(2)

次に「扶桑」の問題であるが、扶桑は中国では東海の日の出る方にある神樹であるが、中国人の地理上の知識が東方へ拡がるとともにその特定された地が山東半島から朝鮮半島を経て我が国まで到達して、日本の異称・別称にもなっている。この点は、「日本」も事情は同じである。「日本」

の「本」も木の下の処を意味し、その木は扶桑樹の木であり、五行説では東方は木の性にあたる。「日本」は、東方はるか彼方にある扶桑の樹のものとから太陽(日)がのぼってくる様子をあらわしている。

したがって、この墓誌銘の「扶桑」は西本昌弘のいうように「日本」と同義で用いられているとみることができ、百済の地の「日本」からみて東方太陽の出る処が「扶桑」である。その意味では墓誌銘の「日本」を百済をさすとみる余地もあるのであるが、「風谷」と対句の形となっており、「日本」と「風谷」とは別個の存在として区別しなければならぬ。また当時の半島の情況をみると、「風谷」はやはり高句麗でなく、百済である。なぜならこの墓誌銘では対高句麗戦のことは称軍の事績からみても現われていないとみなければならぬ。

「扶桑」は我が国の文献史料にはこの頃あらわれないので、百済側の史料の問題として、この「日本」「扶桑」を考えるべきであろう。したがって、この頃「扶桑」が我が国(倭国)の異称・別称として定着していたわけでない。扶桑が日本国の別称となるのはずつとのちのことである。あくまで百済側(墓誌銘での)で使用された用例としてのみとらえるべきであろう。

「風谷」は、易では巽の東南方面にあたるが、『三国史記』文武王五(六六五)年八月条には、唐の高宗の命令によって、勅使劉仁願のもとで新羅文武王と百済の熊津都督の扶余隆が能津就利山で会盟したが、この時白馬を犠牲にして、天地の神々や川・谷の神々を祀って盟約したとある(このことは『冊府元龜』外臣部・盟約にも詳細にのせられている)。このことで「風谷」を百済の地に特定する根拠とはならないのであるが、結局は百済滅亡(六六〇年)後の百済の遺臣や土着勢力の猛烈な反攻、百済復興運動と倭国の支援といった半島の緊迫した情勢からの判断である。

次の「盤桃」については、疫神信仰(追儺)に関連している。

蔡邕「独断」(後漢時代)によれば、海上はるかに度朔山という山があり、頂上には桃の木があつて、曲がりくねって三千里にわたつてのびている。そしてその垂れさがった枝の東北に鬼門があつて、神荼・鬱壘の二神がその門にあつて悪鬼たちを捕えているという。

同じことは王充「論衡」(後漢、十六卷乱龍第四十七)でも上古、神荼・鬱壘がいてよく鬼を執うもので、東海の度朔山の上に居て桃の樹の下に立ち百鬼を簡閲しているという。

「独断」や「論衡」では桃の木は疫病などを防ぐ魔除けの力をもっていたので、桃の木を切つて人形(桃人)を造つて戸口に立てかけ魔除けとした風習を伝えている。

筆者はこの東海中の度朔山をもつ島を耽羅国(済州島)に比定したい。この済州島は漢翠山(一九五〇m)が中央にあつてなりたっている韓国最大の島である。そして韓国本土とは違つて南方的で海洋的な独自の基層文化をもつ島でもある。耽羅国の歴史は五世紀末頃には百済に服属しており、我が国との交渉も斉明天皇七年五月条に初めて朝貢してきたことがみえる(『日本書紀』)。その後天智朝に二回、天武朝に三回、持統朝に二回遣使してきたことがみえ、「百済救援の橋頭堡として戦略的な価値をもつ」国であるとみられていた。当然百済側に立つて支援したであろう。こ

のことは『旧唐書』巻八四、劉仁軌伝でも窺うことができる。

……仁軌遇倭兵於白江之口、四戰捷。焚其舟四百艘、煙焰漲天、海水皆赤、賊衆大潰。餘豊脱身而走、護其宝劍。偽王子扶余忠勝・忠志等率士女及倭衆并耽羅國使、一時并降、百濟諸城皆復帰順。(傍点、筆者)

ここでは、白村江海戦における大敗(八月)とともに、陸戦では州柔(周留)城を根城としていた余豊璋が北(高句麗)に逃れ、豊璋の王子忠勝・忠士らは「士女・倭衆・耽羅國」を率いて降伏したのである(九月)。

また先にみた六六五(麟徳二)年八月の熊津城での百濟扶余隆と新羅文武王との盟約の時、耽羅・倭人の使もこの盟誓の儀に関わったのではないかと鈴木靖民が指摘しているのは注目される。

【冊府元龜】巻九百八十一、外臣部・盟誓によると盟約が終つて盟約書を新羅廟に藏したあと「於是、仁軌領新羅・百濟・耽羅・倭人四国使、浮海西還、以赴太山之下」とある。同じことは『唐会要』巻九十五、新羅でも仁軌が「新羅・百濟・耽羅・倭人四国使」を領いて太山(泰山)の封禪の儀にむかつたとあり、『三国史記』の新羅本紀、文武王五年八月でも仁軌が「我使者(新羅の)及百濟・耽羅・倭人四国使」を領いて泰山へむかつたとある(なお、『旧唐書』巻八十四、劉仁軌では「新羅・百濟・耽羅・倭四国酋長」を領いたということになっている。酋長については後述)。

これをみる限りでは、耽羅も白村江前後に百濟復興運動に倭国と共同歩調をとっていたことが推測される。

(3)

さて、「日本の余曠」を筆者は主に百濟内にいた倭系百濟官僚や倭人系集団と考えたが、この点に関連して気になるのは、百濟熊津都督の扶余隆と新羅文武王との盟約の儀式に耽羅の使者とともに参列していた「倭人の使」である。彼らはこのあと劉仁軌に領られて泰山の封禪の会に赴いたとする点である。これら一連の「倭人の使」の行動が本国(倭国)政府の指令のもとになされたとは到底考えがたいし、またこの時点(即ち、六六八年の高句麗滅亡以前)で、倭国(日本)が唐側に恭順の意を示した、あるいは降伏したということはまず理解できない。

この高宗の封禪の儀は麟徳元(六六四)年七月に勅語されたもので、勅旨では麟徳三(六六六)年正月を以って岱宗(泰山)において封禪の儀式を行うこと、諸州都督刺史は二年十二月をもつて泰山に集まるよう、諸王は十月に東都に集まるようにとのことであった(『冊府元龜』巻三十六、帝王部、封禪第二)。そして二年十月高宗は東都を發して泰山の東嶽に赴いたとあつて、皇帝に従つて「突厥・于闐・波斯・天竺國……倭国及

新羅・百濟・高麗等諸蕃酋長、各率其屬扈從したとある。したがって、十月皇帝に扈從して東都を出発して泰山に赴いた「倭国の酋長」と十二月劉仁軌に領られて直接泰山にむかった「倭人の使」(『唐会要』卷九十五、新羅や「冊府元龜」卷九百八十一、外臣部・盟誓も同じ。但し、『旧唐書』卷八十四、劉仁軌伝では仁軌は「新羅及百濟・耽羅・倭四國酋長」を領いたとある)とは別個の存在ということになる。

これは結論を先に言えば、百濟の熊津都督府の主導によるものであって、劉仁軌に領られた「倭人の使」は、熊津城での新羅王と扶余隆との盟約に参列した倭系百濟官僚・倭人系集団の首領が「使者」に仕立て上げられたものであって、一方「倭国の酋長」の方は、白村江の戦いで捕虜にされた將軍・兵士であろうか。いわば熊津城での盟約への参加も、封禪の会への参加も唐の熊津都督府の主導のもとに計画されたもので、倭国(日本)からは、一定の自立的立場にあった倭系百濟官僚・倭人系集団が熊津都督府の下に組み込まれた結果であろう。

以上の点を理解するためには少々迂回した考証が必要であろう。

白村江の戦いは、倭国が百濟救援に失敗したことで、百濟を最終的に滅亡にみちびいた。しかし唐にとっては、この白村江の海戦も数ある戦役の一つであって、真の目的は高句麗平定である。

池内宏や鈴木靖民は、百濟遺臣らの復興運動の鎮定後、百濟鎮將劉仁軌の上表(六六四年十月)に「陸下若欲殄滅高麗、不可棄百濟土地、余豊在^在北、余勇在^在南、百濟・高句麗旧相党援、倭人雖遠、亦相影響、若無兵馬、還成一國」(傍点、筆者、『旧唐書』卷八十四、劉仁軌伝)とあることに注目されている。ここでは唐(鎮將)は、白村江の戦いに倭国を大破しながらも、なお百濟遺臣や高句麗と倭国との連携・結合を警戒して、百濟堅固のため兵馬の増援を求めた劉仁軌の戦略が示されている。この上表によって高宗は劉仁軌を渡海させ、扶余隆を還したのである。

白村江の敗北は滝川政次郎や利光三津夫のいうように、これによって日本(倭国)軍が潰滅し、再び立つことができなくなったというように、考えるべきではなからう。

この点は、『日本書紀』にも、白村江の戦い以前ではあるが、「日本の高麗を救ふ軍將等、百濟の加巴浜に泊てて火を燃く……」(斉明天皇七(六六一)年(是歲)の話があり、さらに天智天皇元(六六二)年三月条に「是の月、唐人・新羅人、高麗を伐つ。高麗救を國家に乞へり。依りて軍將を遣して疏留城に拋らしむ。是に由りて、唐人、其の南界を略むること得ず。新羅も其の西界を輸すこと得ず」とある。さらに天智六(六六六)年正月には高句麗が朝貢してきて、倭国との友好関係を強化しようとした。百濟復興軍の百濟王として擁立された豊璋が白村江の敗北のあと、北の高句麗にのがれていったとある点もふくめて倭国の高句麗支援の動きを唐側が懸念していたことは事実とみてよからう。また北に逃げた豊璋に依りて隆の弟の余勇は倭国に逃げて(『旧唐書』劉仁軌伝)、利光三津夫がいうようにある種の「七命政權」を立てたことは考えうる。余勇は「以百濟王善光王、居于難波」(『日本書紀』天智三(六六四)年三月条)にみえる百濟王善光王と同一人物とみる利光・池内の見解は注目される。

こうしてみると唐側が白村江戦の後も倭国の半島への再度の反攻、そして高句麗や百濟残存勢力との連携を警戒していたことは事実とみてよく、そこで祢軍など旧百濟高級官僚で、早く唐側に帰服した人物を倭国との外交交渉の場に登場させることになった。

祢軍墓誌銘を解釈する上で祢軍の二度にわたる倭国への派遣は注目される。

【日本書紀】天智三（六六四）年五月条に「百濟鎮將劉仁願、朝散大夫郭務悰等を遣して表函と献物とを進る」とある。

十月には郭務悰等に「勅」があり、饗応もあつて十二月に帰国となつてゐる。

【日本書紀】には「郭務悰等」とあるが、「海外国記」（『善隣国宝記』上）には「天智天皇三年四月、大唐客来朝。大使朝散大夫上柱国郭務悰等卅人、百濟佐平禰軍等百余人、到対馬島……」とあつて、祢軍の派遣が記されている。また「海外国記」をみるとこの派遣が「百濟鎮將の私使」ということで表（將軍牒書）も朝廷には上進されず、入京も許されなかつたとある。百濟鎮將劉仁願は百濟の王都泗泚城にいて「熊津都督」で百濟の実質的司令官であつたが（この時、劉仁願は唐に帰国しており、配下の劉仁軌が執行者であつた）、唐本国からの使者でないということで入京を許さなかつた。但し、その間、十月に中臣鎌足が沙門智祥を遣はして物を郭務悰に賜うなどそれなりに饗応して十二月には帰国しているので、すぐに追い帰したということではない。

このあと翌年天智四（六六五）年九月になると、以下のようにみえる。

唐國、朝散大夫沂州司馬上柱国劉德高等を遣す。等といふは、右戎衛、右衛門、右將軍、上柱国、百濟禰軍、朝散大夫柱国郭務悰を謂ふ。凡て二百五十四人。七月二十八日に對馬に至る。九月二十日に筑紫に至る。二十二日に表函を送る（傍点、筆者）

今度は唐本国からの使者ということでその目的は達成されたと思われる。劉德高一行が入京を許されていることは「懷風藻」に大友皇子（天智の長子）に出会つた劉德高の言動が伝はつてゐることによつてよく知られてゐる。ただ、この遣使の目的は史料では明示されていない。しかし、二度つづけての遣使であり、第一回目では郭務悰の三十人と祢軍の百余人で合計百三十余人であつたが、二回目は二五四人とあつて二倍近くにふくれあがつてゐることは、この遣使が外交交渉であるにしてもかなり威圧的な行動をともなつてゐたことが窺える。この遣使の目的は熊津都督府の百濟領の占領強化や対日牽制、対日和親、さらに高句麗への救援の停止など種々の外交案件がふくまれていたと思われるが、この唐のネライはほぼ達成されたと思われる。祢軍墓誌銘はそのことを語つてゐる。すでにみたように祢軍は「海左に格誤し、瀛東に龜鏡」たる有能な外交武官としてその名前が聞えており、それ故皇帝からとくに選ばれて、倭国を懐柔する役目を負つて倭国に派遣された。蒼鷹と赤雀の二隻の軍艦（おそらく二回目のものである）は祢軍が仕立てたもので、威風堂々と倭国に乗り込んできた。そして、皇帝の權威を示し、半島情勢の利害得失を説い

たネバリ強い交渉の結果、「僭帝一旦称_レ臣。仍領_二大首望数十人_一、将入朝謁」という成果をもたらしたのである。もちろんこの成果は称軍―唐側の外交的「解釈」であって、倭国の帝(天皇)が事実として_レ臣と称したかは別問題である。この時点で倭帝が「降伏」したということは考えがたい。

(4)

ところで「日本書紀」には十二月の劉徳高ら一行の帰国のあと「是の歳に小錦守君大石等を大唐に遣す云々。等といふは、小山坂合部連石積・大乙吉士岐弥・吉士針間を謂ふ。蓋し唐使人を送れるか」とある。

問題はこの守君大石らの遣唐使派遣であるが、「日本書紀」では「是の歳」条に記載されており、月日がわからず、また「大唐に遣す云々」となっている詳細を伏せているような感じもある。注では「蓋し唐の使人を送るか」とあつて十二月に帰国した劉徳高らを送つたという書記編者の推測も注にのっている。筆者は守君大石らの遣唐使は、おそらく二回目の劉徳高―称軍・郭務悰の外交交渉の結果(成果)と考えるので、おそらく十二月劉徳高一行が帰国する時に、彼らを送るといふ名目のもとに派遣されたと考える。したがって称軍墓誌銘の「僭帝一旦称_レ臣。仍領_二大首望数十人_一、将入朝謁」というのは、この守君大石らの入京、拜謁と対応するものであろう。この守君大石らの派遣の目的を高宗の封禪の会への参加要請の結果とみる見解もある。しかし、守君大石らの入唐は十二月の出発であると思われるから翌年正月の封禪の会には間に合わなかつたし、第一、封禪の儀への参列は、倭国の唐への降伏も意味するものであつたから当然のめる要求ではなかつた。したがって、劉徳高らの派遣の目的がその要請であつたとは思われない(劉徳高らの派遣の時期が九月、筑紫到着であつたことをみても)。

この守君大石らが唐の朝廷に入ったであろうことは、天智六(六六七)年十一月になって、副使であつた坂合部連石積らが熊津都督府の熊山県令の司馬法聰らによつて筑紫に送られてきたことによつても知れる(「日本書紀」天智天皇六年十一月条。ただし大使守君大石の名はみえない)。そこですでにみた劉仁軌によつて引率されて泰山に赴いた「倭人の使」や、十月に東都に集まつて高宗に扈從した「倭国の酋長」は守君大石らの一行とは別個の存在と考えられる。すでに指摘したように「倭人の使」は倭系百済官僚、あるいは倭人系集団の首領か。また「倭国の酋長」は唐側の捕虜となつた将軍・兵士であつたと考える。いわば彼らは百済の熊津都督府との関係のなかで考えられるべき存在で、本国倭国とは別個の論理で動いていたと思われる。ただ守君大石ら一行は、熊津都督府を経由して唐に向かつたことが推測される(前掲、副使坂合部連石積らが熊津都督府の司馬法聰らによつて送られて帰国したとある)から、熊津都督府からは相対的に自立してきた百済遺臣勢力や倭系百済官僚・倭人系集団との接触・連絡はあつたと考えられる。

なお、守君大石らの唐への入朝の意図ははっきりしないが、おそらく唐の高句麗総攻撃(六六八年)に対する倭国側の黙認(同意)があつたか

もしれないし、倭国側の中立的立場をとるとの言明が伝えられたかもしれない。逆の立場でいえば、唐は倭国を攻撃しないとの言質をえたかもしれない。

六六九年の河内直鯨らの遣唐使が唐の高句麗平定を祝賀したとあること（『日本書紀』天智天皇八年是歳条、『新唐書』日本伝）が正しいとするならば、守君大石らの入朝と関連しているかもしれない。

祢軍墓誌銘では、祢軍は倭国からのこの守君大石らの遣唐使派遣の功績がみとめられて「左戎衛郎将」（正五品上）を授かったということになる。それは高宗、乾封元（六六六）年のことであった。『日本書紀』の二回目の祢軍の官職は「右戎衛郎将」とあるから昇格したことがわかる。

3 祢軍と新羅関係

このあとしばらくして祢軍は「右領軍衛中郎将兼校校熊津都督府司馬」（定四品上）を授けられている。これはこのあと祢軍が対新羅工作をしたことと関連がある。

高句麗滅亡（六六八年）以後、唐と新羅は対立するようになった。高句麗もまた百済と同じく滅亡後反乱軍が唐に対する反攻を展開する。一方新羅は元高句麗大臣淵浄土の子安勝を高句麗王として漢城にむかえ入れ唐と対立する。新羅は百済を自己の領土にくみこむため百済の多数の諸城を奪取し熊津都督府との対立も決定的なものになる。そうしたなかで、熊津都督府の司馬禰軍は新羅に外交交渉のため派遣されたが、新羅文武王は禰軍を留めて還さなかった。このことは『三国史記』新羅本紀、文武王十（六七〇）年七月条に以下のようにみえる。

王、百済残衆の反覆を疑い、大阿儺儒敦を熊津都督府に遣わし、和を請う。（百済都督府）従わず。乃ち司馬禰軍を遣わし窺覘す。王我を謀らんとするを知りて、禰軍を止めて送らず。兵を挙げて百済を討つ。

新羅の唐に対する不満（言い分）は、新羅はすでに鷄林州都督府として唐の羈縻州支配の中に組みこまれ（六六三年四月）唐の一州ということになっており、一方百済も一国として独立する勢いを示しているとの認識があった（『三国史記』新羅本紀、文武王十一年七月条）。

文武王十一（六七二）年十月には新羅と唐の正面対決となり、新羅は唐の戦艦七十余艘を攻撃し、士卒百余人を捕虜とし、その他溺れ死んだものは数えきれなかったとの戦果を伝えている（『三国史記』新羅本紀、文武王十一年十月条）。このあと翌年（六七二）にかけて唐の反撃もあって唐との戦いが長期化することも予想されたため、文武王は留めていた唐将などとともに司馬禰軍など軍士百七十人を送り返して謝罪したという

〔三国史記〕新羅本紀十二年九月条。

こうしてみると祿軍は熊津都督府の司馬として六七〇年七月に新羅に派遣され、新羅で長い間(二年すこし)抑留されて六七二年九月に許されて帰還することができた。こうしたことがあって墓誌銘によると「咸亨三年十一月廿一日」に「右威衛將軍」を授けられることになったのである。禰軍は『三国史記』では「司馬禰軍」として登場しており、これは墓誌銘の「檢校熊津都督府司馬」に対応する。したがって、この官職は六七〇年七月以前、六六〇年(左戎衛郎將)以後に授けられたものであると考えられる。

おわりに

以上、祿軍の事情を『日本書紀』『三国史記』にみえる祿軍の活躍を背景に墓誌銘をよみとった。祿軍は、倭国と新羅との間で外交武官として活躍したのであり、この墓誌銘には対高句麗戦争のことはでてこない。

ところで筆者は「時に日本の余嚙、扶桑に拠りて誅を遁れ、風谷の遺叱、盤桃を負いて阻み固む」の「時に」の部分(①)六六〇年の百濟滅亡後のことと考えたが、これを(②)白村江戦の前後の状況をのべたものと解することもできよう。その場合、「日本の余嚙」は、百濟復興運動支援のため朝鮮半島に派遣された倭国の兵、そして白村江戦のあとにも百濟内に残っていた兵(殘党)を意味する。「風谷の遺叱」は、(③)とかわらず「百濟の遺民」と解する。但し(④)の場合、つづく「万騎野に亘り、蓋馬とともに以て塵を驚かし、千艘波を横り、原蛇を援いて縦び満つ」の所をどう理解するかである。この場合、白村江の戦いのあとも、唐軍、倭国の兵(殘党)や百濟の殘存勢力はお互いに兵力をだしあつて戦争状態が終結していないという半島状況を説明したものと理解したい。こう解釈すると次の祿軍の倭国への派遣(六六四年と六六五年)とは直接つながってくるのは強みである。白村江における倭国の救援失敗(補注参照)は大きな事件ではあつたが、それが決して半島における戦争状態の終了であつたのではなく、それ以後の百濟をめぐる情況は新羅との関係もあつて複雑に展開していることはすでにみた。

(①)にしろ、(②)にしろいづれにしても「日本の余嚙」の「日本」は倭・倭国の異称・別称として使われているので、その点ではかわりはない。筆者は結論としては今の所(①)に立つ。この方が、文としては自然な感じがするし、「日本」は百濟内における倭・倭国の表記として始まったと考えるからである。すでに拙著『日本国号の歴史』のなかで、「日本」は中国の古典に出発点をもち、まず百濟で倭・倭国の異称・別称として使用され、それが百濟系渡来人によって我が国にも伝えられ、天智朝頃には倭・倭国の異称・別称として流行していたのではないかと指摘したのであるが、今回の墓誌銘はその確実な同時代史料ということになる。なお、白村江前後の日朝関係史は、朝鮮南部の倭人集団や倭系百濟官僚などの存在・動向を重視することによって、あらたな展望が開けてくるであろう。

注記

- ① 小林敏男『日本国号の歴史』吉川弘文館、二〇一〇年。
- ② 王連龍「百濟人」祢軍墓誌考論」(『社会科学戦線』二〇一一年、第七期)。同「祢軍墓誌と『日本』国号問題」(梶山智史訳)、二〇一二年二月二十五日、明治大学国際シンポジウム「新発見百濟人」祢氏墓誌」と七世紀東アジアと『日本』のレジユメ。
- ③ 墓誌銘は、氣質澤保規「百濟人祢氏墓誌の全容とその意義・課題」(二〇一二年二月二十五日 明治大学シンポ)のレジユメによっている。
- ④ 『三國史記』新羅本紀、太宗武烈王七年七月十八日条に「義慈率太子及熊津方領軍、自熊津城來降」とあり、「熊津方領軍」は熊津の方領(長官)の軍隊と一般的には解釈されているが、張全民はその「軍」を祢軍のことであつた解釈されている(『唐代百濟祢氏家族墓の発見と世余に関する考察』〈江川式部訳〉、明治大学シンポのレジユメ)。
- ⑤ 田中俊明「百濟・朝鮮史における祢氏の位置」(明治大学シンポのレジユメ)。葛継男「祢軍墓誌についての覚書」附録・唐代百濟人関係石刻の釈文」(『東アジア世界史研究センター年報』六号、二〇一二年三月、専修大学社会知性開発センター)。
- ⑥ 『三國史記』新羅本紀、文武王十一年七月条に六六三年の白村江における倭国の船を「倭船一千隻」としている。
- ⑦ 東野治之は、これを軍艦と解釈しているのに従つた。東野治之「百濟人祢軍墓誌の『日本』」(『図書』二〇一二年二月号、岩波書店)。
- ⑧ 氣質澤保規、前掲③。
- ⑨ 氣質澤保規、前掲③。
- ⑩ 星野恒「本邦ノ人種言語ニ付キ鄙考ヲ述テ世ノ真心愛國者ニ質ス」(『史学会雑誌』明治二十三年十月)。
- ⑪ 森公章「白村江」以後」一五八頁、講談社、一九九八年。
- ⑫ 西本昌弘「祢軍墓誌の『日本』と『風谷』」(『日本歴史』七七九号、二〇一三年四月号)。
- ⑬ 葛継男、前掲⑤。
- ⑭ 福井重雅「訳注西京雜記・独断」二〇〇〇年、東方書店。
- ⑮ 山田勝実「訳注論衡」一九七九年、明治書院。
- ⑯ 日本古典文学大系『日本書紀下』斉明天皇七年五月条の頭注、一九九三年(新装版)、岩波書店。
- ⑰ 鈴木靖民「百濟救援の役後の日唐交渉」(『日本の古代国家形成と東アジア』所収、二〇一二年、吉川弘文館)。
- ⑱ 『資治通鑑』卷二〇一、唐紀一七も「倭国使」とあるから、中国文献学の結論として「倭人の使」「倭国の使」とするのがよいであろう。
- ⑲ 松田好弘「天智朝の外交について―壬申の乱との関連をめぐって―」(『立命館大学』四一五〜七合併号、一九八〇年)。

- ⑳ 中村修也は、『旧唐書』本紀に高句麗の滅亡や百済の滅亡は記載されているが、倭国との白村江の戦はみられないこと、ただ直接倭国軍と戦った劉仁軌伝にのみみえることを問題視されている(ただし『新唐書』高宗本紀、龍朔三年九月条には白村江の戦はあるが、倭国の名はみえない)。白村江の戦いの意義・位置づけて東アジア世界の中で改めて再検討してみることは必要であろう。中村修也『白村江の真実―新羅王・金春秋の策略―』二二二～二頁、二〇一〇年、吉川弘文館。
- ㉑ 池内宏「百済滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の関係」(『満鮮史研究上世・第二冊』、一九六〇年、吉川弘文館)。
- ㉒ 鈴木靖民、前掲⑰。
- ㉓ 余勇は、扶余隆の弟で、白村江の戦いのあと倭国に逃げてきたことが『旧唐書』劉仁軌伝にみえる。
- ㉔ 滝川政次郎「劉仁軌伝中」(『古代文化』三六巻9号、一九八四年九月号)、同「七世紀の東亜の変局と日本書紀」(『日本書紀研究6冊』一九七二年、塙書房)。
- ㉕ 利光三津夫「百済亡命政権考」(『律令制とその周辺』一九六七年、慶応義塾大学法学研究会刊)。
- ㉖ 遠山美都男「白村江」一九九七年、講談社(現代新書)は、白村江を未曾有の敗戦、そしてアジア・太平洋戦争と安易にむすびつけて考える後世の史家の見方を批判している(二二〇～三頁)。首肯されるべき指摘である。
- ㉗ 利光三津男、前掲⑳。
- ㉘ 利光三津男、前掲㉕。
- ㉙ 池内宏、前掲㉑。
- ㉚ 滝川政次郎「七世紀の東亜の変局と日本書紀」(前掲㉔)。浜田耕策「劉仁願紀功碑の復元と碑の史料価値」(『朝鮮古代史料研究』Ⅱの三章、二〇一三年、吉川弘文館)。
- ㉛ 鈴木靖民、前掲⑰参照。
- ㉜ 鄭李雲「白村江の戦い後の対外関係―第五次遣唐使の派遣目的と関連して―」(『古代文化』四五巻三号、一九九三年)。鄭は、劉徳高が対馬に着いた七月二十八日以降、八月中に泰山封禅への倭使派遣要請がなされ、八月中には交渉がまとなり倭国側が受諾したので、九月二〇日に一行は筑紫に上陸した。そして九月中に守君大石らの封禅の儀式への派遣がなされたとした。『日本書紀』天智四年条にみられる時間の辻褃合わせと対馬での外交交渉という考え難い見解であると思う。
- ㉝ 鈴木靖民(前掲⑰)は、白村江の戦後においても、熊津都督下の親唐勢力と日本(倭国)との連携を保とうとする勢力との間の複雑な半島情勢を考えている。

補① 白村江の戦い（六六三年八月）における倭国軍は、いはらのきみのみ 廬原君臣の率いる一万余の兵で白村江口で唐側によって四〇〇艘が焚かれて撃沈されたという（『日本書紀』天智天皇三年八月条、『旧唐書』列伝、劉仁軌伝）。この倭国の軍船は、百濟遣臣勢力や豊璋の帰国に際して倭国から護衛として派遣されてきた軍将たち（『日本書紀』天智即位前紀九月に五千人の兵が護衛したとある）の最後の拠点であった周留城に軍兵・食料・武器などを送りこむ船団でもあったから、唐のような軍艦を主力とするものではなかったろう。したがって、白村江の戦いというものは唐の海軍と倭国の海軍との全面的な対決というようなものではなく、倭国の周留城への輸送船団が偶々白村江口で唐の軍艦に狙い打ちされたというものであった。それ故、六六三年三月に編成された前・中・後の三軍の二万七千余の軍は新羅攻略にむかったがほとんど無傷であったろう。百動復興運動は結局倭国の救援が届くことなく、百濟遣臣間の内部対立もあって、肝腎のシンボルであった豊璋王が高句麗に逃げるといふことで失敗に終わったのである。

補② 善光（禪広）は、『統日本紀』天平神護二（七六六）年六月条によると、兄・豊璋とともに義慈王の子として舒明天皇の御世に入侍した。そして、斉明朝の「百濟滅亡」の時、豊璋は百濟再興の主として遣臣福信らに迎えられたのに対して、禪広は「禪広、因不_レ帰_レ国、藤原朝廷賜_レ号、曰_二百濟王_一」と簡単に記述されている。これによって、一般的には禪広（善光）の方は白村江戦争の大事な時に本国（百濟）に帰還しなかったと解されている。しかし、善光が舒明朝に来朝したことは、肝腎の『日本書紀』にはみえず、『日本書紀』天智天皇三（六六四）年三月条に突如として「百濟王善光王等を以ちて難波居らしむ」としてでてくるのが初見である。この記事は、明らかに「亡命してきた」善光を難波に居住させたとみなされるものである。もしも後代の史料となる『統日本紀』に信頼をおくとすれば、豊璋とともに帰国した善光は、白村江の敗戦で、豊璋の方は高句麗に通れたのに対して百濟にとどまることなく（不_レ帰_レ国）日本に再度亡命したことになる。いづれにしろ推測が多くなるが、『旧唐書』の余勇（豊璋の弟）は善光（禪広）とみる方がよいのであろう。

（付記） 本稿の墓誌銘の解釈にあたっては、大東文化大学の中林史郎氏（中国学科）、小林春樹氏（東洋文化研究所）の御教示をえた。この場をかりて、厚く感謝申し上げたい。